

平成紙



おりおりの記

オペラとの出会い

みずほ証券
取締役会長

今泉 泰彦

昨年の11月、御取引先のご好意でホセ・カレーラスのリサイタルを鑑賞させていただいた。自分の体が楽器そのものであるオペラ歌手にとり年齢による体力の衰えは最大の敵であろう。往年のオペラ界の大スターも既に70歳、その歌声や如何にと思う中、カレーラスが登場する。大きく息を吸い込み、ひと呼吸置いてから歌い出す。発せられた歌声は予想をはるかに超えて音質は柔らかく音量も十分であった。その後は6曲に及ぶアンコールを含め熱演が続き、リサイタルの2時間はあっという間に過ぎた。

私がオペラに出会ったのは今からおよそ25年前、NYに駐在していた時のことだ。白血病を患ったカレーラスが奇跡的なカムバックを果たし、ルチアーノ・パパロッチェ、ブラシド・ドミンゴとともに三大テノールの名称で世界中の人気を集めていた頃だ。

NYと言えばメトロポリタン・オペラだが、正直なところ最初は家内に引っ張られて行くという感じであった。そんな自分に変化が起きたのは、三大テノールの一人であるパパロッチェの歌声を聴いた時だ。たしかヴェルディの『リゴレット』に登場した時だったと思う。初めて聴いたその歌声には度肝をぬかれた。艶やかな音色、天まで届くような高音の伸び、そしてリンカーン・センターの大きなホール一杯に広がる圧倒的な音量。脳細胞が覚醒されオペラに対する神経回路が開かれ

た瞬間であった。難しいことは分からないが、それ以来オペラを聴くことが楽しみの一つとなった。三大テノールをはじめシェリル・ミルンズ、トーマス・ハンブソン、キリ・テ・カナワ、キャサリン・バートルなど当時全盛のスター達の歌声に出会うことができた。

日本に帰国してからは、時間や予算の制約もあり海外からの有名劇場の公演にはなかなか足を運べていない。それでもリサイタル形式のコンサートやライブビューイングなどを含め自分なりの方法でオペラを楽しんできた。2年前にはついに念願かないザルツブルグとヴェローナに行くことができた。オペラの世界への扉を開いてくれたパパロッチェはもういない。彼の全盛期にその歌声を直に聴くことができたのは正に僥倖であった。人との出会いと同様に音楽や絵画といったものとの出会いが、一瞬のうちに人生に彩りや輝きを与えてくれることがある。カレーラスの熱唱を聴き終えて、昔を思い出しながらそんなことを考えた。

